

仏像の見わけ方

大日如来

大日如来(金剛界)

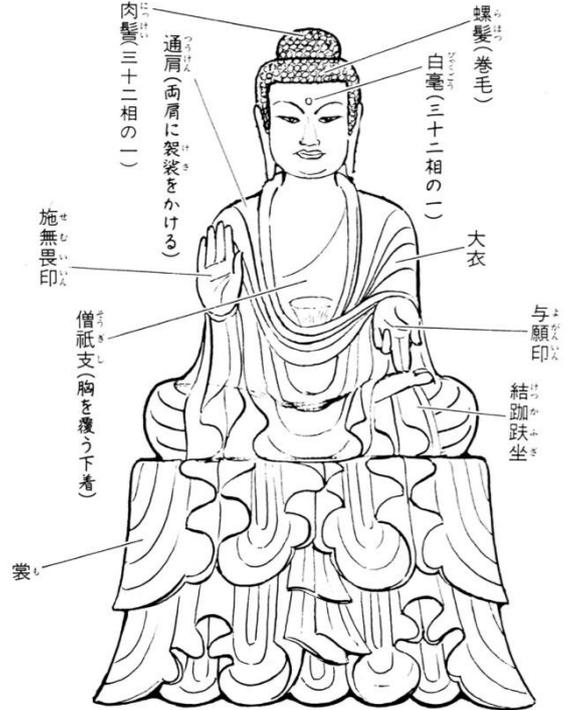
金剛界曼荼羅の主尊として中心に置かれる



釈迦如来

釈迦如来

如来像は一般に、悟りを開いた後の釈尊の法衣だけをまとう姿が基本で、装身具は付けていない(大日如来は除く)



阿弥陀如来

阿弥陀如来

三尊形式をとることも多く、向かって右に観音、左に勢至を脇侍とする。



人差し指を曲げた阿弥陀の定印(上品上生印)

薬師如来

薬師如来

日光菩薩(向かって右)、月光菩薩(左)を脇侍とし、十二神将が従うこともある。



弥勒菩薩

弥勒菩薩

半跏思惟像の他、五仏を配した宝冠をかぶったり、宝塔を手に載せたりする姿が一般的。



五仏(五智如来)を付した宝冠

宝塔

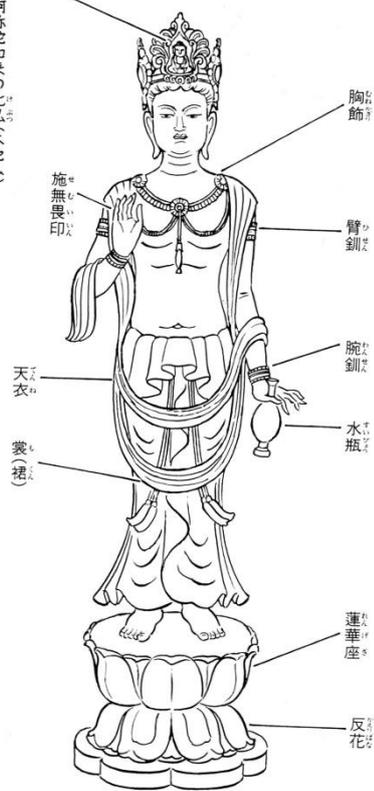
聖観音菩薩

聖(正)観音

多くの变化観音があるが、一面二臂のこの聖観音が基本形。独尊として、また勢至菩薩と共に阿彌陀如来の化身として、阿彌陀仏の向かって右に祀られる。

宝冠に阿彌陀如来の化身(本地仏)をつけているのが観音像の特徴

人々のけがれを除くための、或いは濁きに苦しむ人々への水を入れた水瓶や未開敷の蓮華を持つ姿が多い。



胸飾

臂釧

腕釧

水瓶

蓮華座

反花

施無畏印

天衣

裳(裙)

如意輪観音菩薩

如意輪観音

如意宝珠と輪宝(法輪)を持つ観音で、二臂 四臂 六臂などの顔があるが、六臂で右ひざを立て頰杖をついた坐像が一般的。

仏の説法を表わす法輪

台座 光明山の大地を押える

阿彌陀如来を付した冠

衆生の救済を思惟する姿

人々の願いを意の如くに叶える不思議な珠

衆生の苦を救うことを表わす数珠

輪王坐(右膝を立てた坐法)



十一面観音菩薩

十一面観音

頭上に十ないし十一の小面を持つ観音様。頭上の顔は、衆生に合せて慈悲あふれる顔、怒り顔、さげすみの笑いなどして衆生を導く。

岩座に立ち、教化の積極性を表わす(長谷寺式十一面観音)

清らかな心が開花した仏の心を表わす蓮華

仏の心を宿した人間の心を表わすつぼみの蓮華

不老不死の妙薬、甘露の水が入った水瓶



錫杖

裳(裙)

虚空蔵菩薩

虚空蔵菩薩

求聞持法や十三詣りの本尊として有名。形は様々だが、五仏の宝冠をかぶり、宝珠を載せた蓮華を持つことが多い。



馬頭観音菩薩

馬頭観音

頭に馬頭を載せ、忿怒の顔がこの観音の特徴。三面八臂で赤色の肌をし、頭に馬頭を載せ、忿怒の顔が多い。牛馬の息災・安全を祈る庶民信仰から道傍にも祀られる。



地藏菩薩

地藏菩薩

菩薩でありながら身を飾ることなく、頭を丸めた僧の姿で、手に錫杖、宝珠を持つのが一般的だが、子供を抱く像、手を願印や施無畏印にしたり、経を持つ像などもある。



不動明王

不動明王

無明煩惱を焼き尽くす火焰。毒を持った竜を食べるというカルラ鳥(金翅鳥)の形をしたカルラ焰の場合もある。

火焰を背に右手に剣、左手に繩を持ち、左右に不動の仕事を手伝う二人の少年、矜持羅童子、制多迦童子が控えることも多い。



人々の迷った心が動かぬように大盤石の上に立つ

教化し難い衆生を屈服させんとする忿怒の相
母親が一人子を可愛がるように、仏が衆生を慈しむことを示す左に垂らした一本の弁髪。
降参しない者を縛り、仏の世界に引き上げる編索

貪瞋痴の三毒を殺す智剣

裙(裳)

愛染明王

愛染明王

愛欲貪染の煩惱がそのまま菩提心であることを悟らせる明王で、練結びの本尊。その名から、特に芸者や染物屋さんに信仰者が多い。赤い身体で獅子冠をかぶり、三目一面六臂の忿怒形が一般的。



第三眼(三界を見通す三つの目)

障害を降伏し強さを表わす獅子冠

衆生の無明煩惱を握る拳
六道の全てを救うことを意味する六本の手

未敷蓮華

矢

悟りへ向かう強い心を表わす焰
燃える太陽の大慈悲を表わす真つ赤い身体
人々の心を目覚めさせる鈴

大円光

人々が本来持っている五智に気付かせる五結杵

宝瓶

青面金剛

青面金剛



日月

觸體

第三眼

輪宝

弓

矢

三股叉(三叉戟)

悪鬼を踏みつける

「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿

庚申の夜、体から抜け出て、その人の悪事を天帝に報告するという三匹の虫が、天に昇らないように眠らずに夜を明かす庚申信仰の本尊。
夜が早く明けるのを願うための夫婦の鶏(上の日月も同じ意味)が側にいる場合もある。

一面三目六(または四)臂の忿怒形で、鬼を踏みつけた立像が一般的。足元に刻まれた三猿と共に石像が多い。